

カンキツ「熊本EC12」における結果母枝の長さ及び角度の違いと着花及び着果性

「熊本EC12」の結果母枝は、約40cmまでは長いほど有葉花数は多くなり、着果数は多くなる。また、長い結果母枝では、角度が下向きであるほど着果数は多くなる。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室 (担当者: 佐々木雲海)
農業研究センター天草農業研究所 (担当者: 川端義実)

研究のねらい

「熊本EC12」は、本県で育成した年内に収穫できる早生カンキツである。本品種は2017年に品種登録され栽培面積は増加しているが、安定生産のための生育特性が明らかではない。そこで、栽培管理を行ううえで重要な指標となる結果母枝の特性を明らかにする。

研究の成果

1. 結果母枝は、約40cmまでは長いほど有葉花数は多く、直花数は少ない傾向となる(表1、表2)。
2. 有葉花は直花に比べて結実率が高い。また、結果母枝が長いほど結実率は高く、着果数は多くなる(表1、表2)。
3. 無着花新梢数は、結果母枝が長いほど多くなる(表1、表2)。
4. 長い結果母枝においては、角度が下向きであるほど着果数は多くなる(図1)。

成果の活用面・留意点

1. 果樹研究所においては黒雲母片岩を母材とする軽埴土に植栽した高接ぎ9年目(2022年)および6年生樹(2023年)での結果であり、天草農業研究所においては、玄武岩を母材とする埴土に植栽した4~5年生樹での結果である。樹勢は、果樹研究所に比べて天草農業研究所が強い状況であった。
2. 前年の着果が少なく着花過多が心配される年は、短い結果母枝はせん除し、無着花新梢が発生し易い長い結果母枝を残し、結果母枝の切り返し等を行い着花抑制を図る。
3. 前年に適正着果(葉果比100程度)させた樹の結果母枝を調査した結果である。

表1 「熊本 EC12」における結果母枝長別の着花及び着果性 (果樹研究所)

年度	結果母枝長 (cm)		着花数 (個)			無着花新梢数 (本)	着果数 (個)			結実率 (%)		
	平均	範囲	直花	有葉花	合計		直果	有葉果	合計	直果	有葉果	合計
2022	4	4~5	3.0	0.3	3.3	0.0	0.1	0.0	0.1	3.3	0.0	3.0
	11	10~12	2.3	2.3	4.6	1.2	0.1	0.1	0.2	4.3	4.3	4.3
	20	19~20	1.5	3.4	4.9	3.6	0.1	0.4	0.5	6.7	11.8	10.2
2023	6	5~6	8.4	0.0	8.4	0.0	0.3	0.0	0.3	3.6	-	3.6
	11	10~12	10.3	1.6	11.9	0.0	0.3	0.1	0.4	2.9	6.3	3.4
	20	17~22	7.3	6.8	14.1	0.9	0.3	0.5	0.8	4.1	7.4	5.7
	29	28~31	2.5	6.8	9.3	4.3	0.0	2.3	2.3	0.0	33.8	24.7

注) 4月下旬に結果母枝長及び着花数を調査し、6月下旬に着果数を調査

表2 「熊本 EC12」における結果母枝長別の着花及び着果性 (天草農業研究所)

年度	結果母枝長 (cm)		着花数 (個)			無着花新梢数 (本)	着果数 (個)			結実率 (%)		
	平均	範囲	直花	有葉花	合計		直果	有葉果	合計	直花	有葉果	合計
2022	5	4~8	3.9	2.3	6.2	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	4.3	1.3
	10	9~13	4.3	3.0	7.3	0.6	0.3	0.3	0.6	7.1	10.0	8.0
	20	17~22	2.5	7.3	9.8	1.3	0.0	2.2	2.2	0.0	30.1	22.2
2023	5	4~7	7.3	1.2	8.5	0.0	0.1	0.6	0.7	1.4	50.0	7.8
	10	9~13	5.7	2.8	8.5	0.8	0.0	0.3	0.3	0.0	10.7	3.9
	17	14~21	2.3	4.9	7.2	2.4	0.0	0.9	0.9	0.0	18.4	12.3
	35	27~41	0.8	14.7	15.5	2.6	0.1	6.7	6.8	12.5	45.6	44.1

注) 4月下旬に結果母枝長及び着花数を調査し、6月下旬に着果数を調査

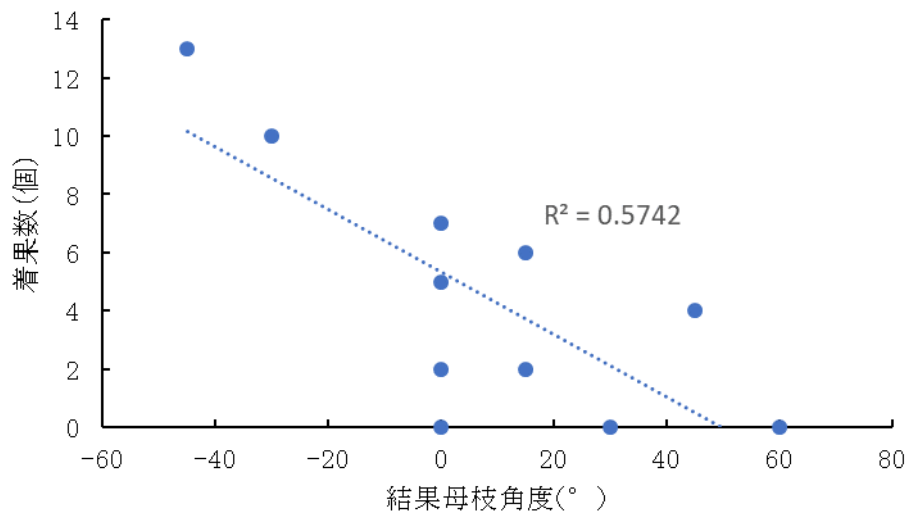


図1 「熊本 EC12」における結果母枝角度と着果数の関係 (2023年、天草農業研究所)

注1) 結果母枝長は約30~40cmにおける結果

注2) 結果母枝角度は結果母枝の基部と先端を直線で結んだ時の角度

注3) 4月下旬に結果母枝長及び角度を調査し、6月下旬に着果数を調査